



シャンダイア物語

第六部 統治の指輪

福田 弘生

Anima Solaris



第四十九章

『目覚める者』

エイトトリ神はミリアが描いた六角形と、レリーバとアタルス達兄弟を調べるように見回した。そしてテイリンに目を移して言った。

「足りない物があるな」

「そうですね、テイリンの力の覚醒にかかわる物」

ジェ・ダンの声が届いた。

(モツホの粉を持つ男がおるぞ)

ミリアは怒ったような顔で西の小屋に声をかけた。

「出ていらっしやい」

小屋の扉を細く開けて暗殺者イサシが顔を覗かせた。

「また捕まっちゃまいそうだなあ」

ミリアがあきれた。

「イサシどうしてここに。テイリン、あなた達よく一緒に旅ができたわね」

イサシはブツブツ言いながら歩いて来ると、懐から小さな袋を差し出した。

「退屈な旅だったが、俺たち別に仲は悪くなかったぞ。さあ欲しいのはこれでしょ、おっそろしく純度が高いから気を付けたほうがいい」

ミリアは袋から粉を少し手の甲に振ると、舐めてみた。

「ああ、これは危険ね。あなたは前回捕まえた時にこれを

飲んだのね」

「危うく死ぬところだった。ジザレはとんでもない物を平気で持たせる」

「マスター・ジザレには一度会わないといけないわね」

そう言うときミアは袋をレリーバに渡した。

「これを少し舐めてみて」

レリーバは指先に粉をつけるとそれを口にした。

「バステラ神の神官には珍しくも何ともない物だけれどね。もちろん普通の人間や下位の神官ならば命にかかわるだろうが」

しかしすぐにレリーバの瞳の色がめまぐるしく変り始めた。

「だがあたしはあまり好きじゃない、人格が安定しなくなるからね」

ミアはティズリに言った。

「ティズリ、レリーバの瞳が黒くなったところで止めて」

ティズリは面食らったような声を上げた。

「どうやって」

「血を凍らせてしまうの」

若い魔女はニヤリとした。

「それは楽しそう」

レリーバが憤然とした。

「あたしは嫌だよ」

「大丈夫、あなたは凍ったくらいで死にはしないでしょ」
テイズリはレリーバの手を握ると、レリーバの瞳が黒くなった時をみはからって一瞬にしてレリーバの血を凍らせた。黒い瞳のレリーバはヒツと一声つぶやいたあと、悲しそうな目で立ちすくんだ。

「寒いわ」

ミリアが声をかけた。

「しばらくの辛抱よ、その瞳の色のアナタが一番素直に心を見せてくれるから」

次にミリアはアタルス達兄弟にモツホの粉を渡し、三人も慎重にその粉をなめた。ミリアはテイリンに素早く言った。

「テイリン、水が必要な」

テイリンはエイトリ神の顔を見た、知恵と医療の神はうなずいた。

「そなたが知っているタルミの里の水を再現するのだ」

テイリンはまず左の手で雪を掬うと手の平の上に乗せた、次に右手で雪を掬って今度は口に含んだ。そして左手をしばらく揺らすと雪が溶けて水になった。テイリンはその水を舐めて首をかしげた。それから今度は右手で雪を掬い、右手を揺らして水をつくった。左手、右手と交互に雪をすくい、変化させ、味を確認するという動作をしばらく繰り返した後、テイリンはうなずいた。

「たぶん、これだと思う」

ミリアは懐から革袋を取り出した。テイリンはそこに雪を詰め込み、変化させて水にした。ミリアは革袋に入った水をアタルス達の元に持って行くと、アタルス達はそれで順番に口を湿らせた。アタルスは嬉しそうな顔をした。

「懐かしい味だ」

ミリアは次に黒い瞳のレリーバに袋を渡した、レリーバはその水を静かに飲み、黒い瞳に涙を浮かべた。

「さあ始めるわ」

ミリアは金と銀の六角形の中心の井戸の横に立った。マコーキンが立ち上がるうとする、ミリアがその肩に手を置いておしとどめた。

「あなたはそばにいてくれたほうがいいような気がする」

ミリアがアタルス達兄弟を向き、テイリンはレリーバのほうを向いた。そして二人は心の中で何かを念じ始めた。

やがてアタルス達が崩れるように倒れた。そして倒れた三人の体から白い影が立ち上り、三人の若者の姿になった。ミリアが泣きそうな声で言った

「ベテアス、ランドリ、ザムロンお帰りなさい」

その時、テイリンが悲鳴にも似た声を上げた。

「レディ・ミリア、レリーバの様子がおかしい」

ミリアが振り向くと、レリーバの美しい白い顔の色が紫色に変色していた。エイトリ神があわてて言った。

「失敗だミア、レリーバが死んでしまう」

ミアは両手で口を覆った。

「レリーバの体内の毒が作用したんだわ、最初に浄化するのはそこだったのよ」

ミアはティズリに言った。

「レリーバの血を」

若いティズリは言われるままに今度はレリーバを丸ごと凍らせた。レリーバの対角の上に立っているベテアスが細い声を上げた。

「キリバ、カリバ、エリバはどうなるんですか」

「わからない、でも何とかしなければ」

ミアがティリンに助けを求めるような目を向けた。

「何かできないの」

ティリンは力を求めるように両手を見つめて首を振った。

井戸に腰かけていたマコーキンは、目の前に居並ぶ人物達を不思議な思いで見つめていた。

（戦場での人の命など、あの魔法使いの投げた礫程も小さい。なのにこの者達は数百年の時を隔てて、なお魂を通わせあおうとしている）

ミアの悲鳴のような声が聞こえた次の瞬間、音が消えた。そして井戸の底からかすかな音が聞こえてきた。

(何の音だろう)

視線を動かしたマコーキンの目の前に降る雪が、空中で静止した。マコーキンの周りのすべての物が止まった。ミアもテイリンもエイトリ神までもが静止した。テイリンの襟元からてんとう虫がマコーキンに向かって飛んで来て、目の前を飛び回った。

(何かが起きたようだ)

マコーキンはミアやレリーバの会話にジェ・ダンという言葉が出てきたのは知っていたが、それがてんとう虫だとは思ってもよらなかった。

「話しかけているのはてんとう虫か」

ジェ・ダンはブンブン怒りながらマコーキンの襟元に飛び込んだ。

(わしはすべての虫達の始祖だぞ、ただのてんとう虫では無い。それより時の停止に気づいたろう)

「ええ、ミアかテイリンの魔法のせいですか」

(それは違う、二人ともそんな力は持っていない。そもそも、この出来事自体がおかしい。レリーバ達の魂の解放がそれほど大きな事件だとは思えないのだ)

「しかしソントールの黒の秘宝を守る神官が関わっています。しかも翼の神の弟子、メド・ラザードの娘、さらにはテイリンやエイトリ神」

(顔触れは錚々たるものだが、元になった事件はこの村の

三組の男女の話だろう。これだけの魔法の存在が集まって、三組の男女の魂の解放だけにとどまるわけがない)

「最重要なのは誰です」

そこに別の声が割って入った。

(わかるだろう)

マコーキンが見上げると、巨大な山猫が立っていた。

「デッサ」

(空間が止まった、これはガザヴォツクの魔法。ミリアやエイトリ神のような力ある者も止まった)

「なぜあなた達は止まらないのです」

「古いからだよ、ガザヴォツクよりもエイトリ神よりもだ」

「ではなぜ私は止まらないのですか」

(それが先程のお前の質問の答えかもしれない。私はこの作用の中心にいるのはテイリンだと思っていた、だが別の存在の重要性が増している)

(第五十章に続く)

著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_/chandaia/index.shtml

とうち ゆびわ
統治の指輪 — シャンダイア物語 —

2009年1月8日 第1版第1冊発行

著者 福田 弘生 (Hiroo Fukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電腦工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電腦工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。